OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	室町幕府と守護権力
Author(s)	川岡, 勉
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44606
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏名	川岡（かわおか） 勉（つとむ）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 18289 号
学位授与年月日	平成16年2月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**室町幕府と守護権力**
論文審査委員	（主査） 教授 平 雅行 （副査） 教授 村田 路人　梅花女子大学教授 馬田 綾子

論文内容の要旨

本論文は、室町・戦国時代の支配体制を幕府－守護－地域社会の相互関係のなかで捉えようとしたものである。本文は序章および3部11章から成り、枚数は849枚（400字詰め換算）である。

まず序章では、守護領国制論からの研究史を振りかえって、幕府－守護体制による地域社会の統合という研究視角の意義について論じている。第1部「南北朝内乱と諸国守護権力」第1章では、在地諸勢力の抬頭が建武政権の王権強化策を生んだ要因であるとし、その国司・守護併置政策に在地勢力の自立化を踏まえた地域支配という、室町期的あり方の原型をみている。第2章では伊与での細川氏と河野氏の協調と対立のなかに、中央国家による地域統合と地域権力の自立化との葛藤を読み込んだ。

第2部「室町幕府－守護体制の構造と変質」第1章では室町幕府の意志決定システムを検討して、諸大名による衆議治定を室町幕府の本質と捉える今谷明説を批判し、幕府を将軍権力と大名衆議との複合体として捉えるよう提唱している。第2章では、嘉吉の乱後の上意の不在、両管領家の対立によって室町幕府－守護体制が変質し、国成敗権の自立化のなかで戦国期に地域諸勢力が葛藤を繰り広げたことを描写した。第3章では14世紀後半から15世紀後半における国人領主支配の変化をたどることによって、将軍－守護－国人の関係が変容する過程を具体的に跡づけた。そして国人領の安堵主体が15世紀前半では将軍・守護・荘園領主と多元的であったのに対し、後半では守護が一元的に安堵するように変化したことを明らかにした。4章では山城国一揆における国人層の主体性を改めて確認し、それを細川政元の山城領国化と結びつけて捉える傾向を批判した。

第3部「戦国期の諸国守護権力」の1章～3章では、戦国期への移行期に守護家では、守護代・宿老層の強大化と、守護家当主を直接支える奉行人組織との整備が同時進行したことを指摘し、両者の対立の激化が15世紀後半から16世紀前半の守護家家督紛争となったと述べる。4章5章では15世紀半ば以降の大内氏が、(1)国人層を御家人として大量に主従制下に組み込んだ、(2)給地分限高にもとづく軍役負担体系を確立して軍事動員体制を創出したことを明らかにした。

論文審査の結果の要旨

本論文の第一の成果は、室町幕府－守護体制の構造的特質を明らかにしたことである。これまで室町幕府論は将軍

権力論に代替されたり、あるいは守護連合体制と捉えられるなど、守護領国制論を批判・継承の対象としながらも、議論が十分詰められないまま放置されてきた。それに対して筆者は、(1)将軍の主導性を大名衆議が支える形で天下成敗が維持されていたこと、(2)守護の国成敗権は国人に支えられると同時に、将軍の保障・規制を受けていたこと、(3)国人の所領が将軍・守護・荘園領主の三者との関わりの中で維持されており、守護が国人領を一元的に安堵する体制が成立していないことを明らかにした。これによって筆者は、国人の動向まで視野に入れながら、将軍優位の室町幕府－守護体制の構造を解明することに成功した。

本論文の第二の成果は、15世紀後半における守護権力の質的変化を解明したことである。筆者は15世紀前半における守護権力の不安定さを指摘する一方、15世紀後半には守護が国人領を一元的に安堵するようになり、国人を軍事動員しうる強固な体制を構築したことを明らかにした。これによって戦国期における守護公権の重要性を認識させるとともに、室町・戦国時代の連続面と断絶面とを新たな実証水準で捉えることに成功した。

とはいえ、本論文にも問題がないわけではない。在地諸勢力の抬頭は本論文を貫く論理的起点であるが、十分な具体化がなされていないし、南北朝守護論も十全ではない。しかし全体像が不鮮明なまま議論が錯綜していたなかにあって、個別研究の蓄積を踏まえて、複雑な事例を整理しながらトータルな政治的枠組みを提示した本論文は、室町・戦国期研究への重要な貢献として、研究史に残るであろう。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。